

全労済協会 慶應義塾大学寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造－新しい福祉価値をどのように生み出すか－」

講義日：2023年12月19日

## 「江戸から現在に至る墨田区のSDGsを考える」

墨田区福祉保健部長（墨田区福祉事務所長） 関口芳正 氏

### ■墨田区の概況と江戸時代のSDGs

私は昭和62年に世田谷区役所に入区しまして、区間交流で墨田区を希望して平成6年に墨田区役所に入区いたしました。それ以降、スポーツ振興課長、子育て支援担当部長、経営企画室長を経験し、福祉保健部長となって今に至ります。本日は、カントやロールズに影響を受けた私自身の哲学的視点と、公務員としての経験からの視点を合わせ、墨田区のSDGsについてお話をさせていただきます。

まず墨田区の概況ですが、1995年以降、人口が増加傾向にあり、2023年10月現在の人口は283,931人となっています。一方で急速な少子高齢化が進行し、核家族化や単独世帯の流入により世帯人口は減少が続いています。地形的には隅田川と荒川に挟まれ、大部分の地域は東京湾の平均満潮時の高さよりも低い場所となっています。また、八代将軍吉宗の時に始まった隅田川花火大会、明暦の大火の焼死者を供養したことが始まりの回向院、両国国技館、すみだ北斎美術館などがあり、歴史と文化の街としても知られています。そして、大きな災害を経験する中で命を繋いできたDNAが残る街でもあり、人々が支えあってきた街でもあります。

歴史的には、古代から中世において東海道の交通の結節点である隅田宿として栄え、その様子は能やオペラで伝わっています。近代には明暦の大火を経験し、その後、本所の開拓が始まります。文化が成熟し、街は江戸から東京へと変わる中で工業地帯へと変容していきます。

SDGsという面では、江戸時代にはごみの処理が発達しました。都市化が進みごみが増えると、慶安の町触でごみの投棄が禁止されました。その後、ごみの投棄場所が指定されます。街の発展、また明暦の大火の処理もあって、ごみ処分を調整する必要がありました。処理業者を指定し、ごみの収集、運搬、処分が分類されます。こうしたことから江戸の街は綺麗になり、その清潔さは当時、さまざまな外国人からも称賛されています。

江戸時代はリサイクルシステムも発達しました。江戸から出る下肥（人糞）は、江戸周辺の農家に運ばれ、そこで肥料として活用されます。また、江戸の炊事で出た灰も、灰買人が回収して農家に売り、やはり肥料として使われました。こうした肥料を使った近郊の農家では、小松菜、練馬大根、谷中生姜などの江戸野菜を作り、これらが江戸で消費されます。このように循環型の社会が形成されていきました。

武士は質素儉約で、庶民も共同の井戸に集まって炊事をし、トイレ、ごみ捨て場なども共同で管理して、支え合って暮らしていました。江戸では貸本も盛んになり、800軒ほどの貸本屋に10万人の読者がいたと考えられています。リサイクルが発達する中で、庶民の暮らしが支えられていたことがわかるかと思います。

## ■関東大震災と SDGs

100年前の1923年9月1日、関東大震災がありました。墨田区も大きな被害を受け、現在の横網町公園付近では火災と竜巻により38,000人が亡くなっています。ここから、セツルメント活動が行われていきます。セツルメント活動とは、貧困問題に対応する民間の社会事業で、地域の拠点に施設を設置し、従事者もその地域に定住して物質的・精神的救済活動を行い、地域全体の生活の向上を目指す活動です。震災直後から、賀川豊彦が神戸から支援活動を行い、10月19日には本所に大テントを立てて救済活動の本部としました。どのような救済活動だったのか、その例としては教育（編み物、裁縫など）、社会事業（無料法律相談）、体育（児童の遊戯、体操の指導）、低利事業資金貸金（信用組合）など、様々な活動が行われました。

## ■東京大空襲と SDGs

1945年3月10日、焼夷弾1665トンが投下され、旧浅草・本所・日本橋区全域が焦土と化しました。多くの方が犠牲になられたのですが、この時の記録や資料はあまり残っていないのが実態です。この前後のセツルメント活動としては、どういったことが行われたのか。この時期の墨田区は乳幼児の死亡率が高い貧困地区でした。新たな労働者としての地方の若者を受け入れ、地域の中で支えていく必要がありました。セツルメント活動としては保育、児童擁護、授産、生活相談、キャンプ、映画会などが民間主導で行われ、若者を支えるセーフティネットの役割を果たします。具体的には、後の初代厚生省保育課長である吉見静江さんが責任者を勤めた興望館の事例があります。吉見さんは、乳児を抱えた母親が授乳に困らないように興望館に呼び込み、地域は興望館に食料を持ち込んで支えたという記録があります。

## ■墨田区の SDGs の現在と、福祉の新たな展開

墨田区の現在のSDGsの取り組みはどうなっているのか。まず雨水利用に関して、先進的な取り組みをおこなっています。国技館では屋根に降った雨水を貯めて洪水を防ぎ、トイレ、冷房、非常時の飲料水に利用。これを区役所や公共施設でも取り入れています。こうした動きが評価されて、雨水利用東京国際会議が2回、墨田区で開催されたほか、雨水利用自治体担当者連絡会や雨水ネットワーク会議全国大会も墨田区で開催されました。墨田区は、2021年度SDGs未来都市、自治体SDGsモデル事業に選定されています。ものづくりの街として、ハードウェア・スタートアップ拠点構想事業を推進しています。

墨田区の福祉をどう考えていくか。個人の人格と尊厳が尊重され、支え合いながら共生できる社会の実現は、行政を含む既存の福祉の担い手だけでは実現できません。従来の福祉の支援者、被支援者という発想では真の共生は生まれず、個人と社会が互恵的関係性を構築する知恵の結集が必要です。包摂的共生社会の実現に向けて、民間企業との戦略的協業、デジタルを活用した福祉課題の解決によって、デジタル社会における互恵関係が保たれ、無意識的なウェルビーイングの向上が図れるのではないのでしょうか。福祉保健×デジタルについては、VTubeを使ったひきこもり支援、アプリを使ったバリアフリーマップの作成、高齢者のデジタルデバインド解消アプリを使ったスマホ講座開催など、様々な取り組みを進めています。私見ではありますが、無意識的な行動変容システムを導入して、ウェルビーイングを向上させることが重要だと考えています。

<文責：全労済協会調査研究部>